

大学・病院

掲載日:07/03/16

創薬センターが本格始動ーアジア・アフリカとの架け橋に 明治薬科大学

明治薬科大学(学長久保陽徳氏)は9日、同大アジア・アフリカ創薬研究センター(森田隆司センター長)の第1回国際セミナーと開設祝賀会を都内で開いた。同センターでは、アフリカを含めた近隣諸国との間で共同研究を行うなど、本格的な学術交流を推進していくことにしている。セミナーには約10人の海外研究者が招聘され、同大研究陣と共に同大キャンパス内で、創薬に向けた基礎研究などの成果が報告され、夕方からは場所を移して祝賀会が開かれた。



祝賀会であいさつする久保明薬
大学長

同センターは、2005年に設立され、日本学術振興会(JSPS)の新規事業「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」に、センター所属メンバーが中心になりタイ、インドネシア、インドの3カ国と、シンガポール、フィリピンの協力機関と共に応募、06年度の拠点機関の一つとして採択された。

これを受けて同年12月には、事業の相手国側拠点機関の一つであるタイ(バンコク)のチェラロンコール大学で学術セミナーを主催し、事業メンバーや明薬大大学院生を含む150余人が参加するなど、本格的に活動がスタートしている。このほかの相手国拠点機関はバンドン工科大学理学部(インドネシア)、マイソール大学理学部(インド)の2施設。

JSPSでは05年度から、アジアにおける世界的水準の研究拠点の構築を目指した「アジア研究教育拠点事業」、アジア・

アフリカ地域の課題解決に貢献することを目指した「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の二つの事業を実施しているが、明薬大の研究課題が採択された「アジア・アフリカ」は、アジアよりも広いエリアを対象にしている。

研究課題「亜熱帯生物由来天然物を創薬シードとする医薬品開発研究」が採用された06年度は62件申請され、採用は5件、しかも薬学分野では1件という厳しい条件の中で採択されている。

資源が貧困なわが国が、新たな創薬研究を進める上で、豊富な資源、学術研究においても発展途上にあるアジア・アフリカ地域と研究者レベルでつながりを持つことの意義は大きく、将来を見据えた国際協力、国際交流の方向性の一つといえよう。明薬大では当面、各国の研究者および医薬品シーズを受け入れ、国内での研究を進めつつ、相手国拠点機関へも若手を中心に研究者を派遣するなど交流を深め、具体的な成果を模索する予定だ。

▼ 大学・病院

掲載日:07/03/16

- ▶ 創薬センターが本格始動－アジア・アフリカとの架け橋に－明治薬科大学
- ▶ 幹細胞から角膜上皮シートの作製に研究グループが成功－東京大学医学部附属病院

▶ 戻る ▶ 07/03/16の記事一覧